

武道論における礼の比較考察 ——武道における礼の問題解決のために——

末次美樹

1、はじめに

我々が普段使っている〈礼〉という言葉には、様々な意味が存在する。礼の内容には①社会の秩序を守ること②相手に敬意を示すこと③マナー④お辞儀など幅広い意味が含まれているが、現代社会における礼の内容や意味は混沌としている。礼＝お辞儀という概念があるため、礼という言葉とその概念が不明解な状態なのである。お辞儀も礼の対象の一つであるが、他にも様々な意味があるということを我々は忘れがちなのである。

武道にも〈礼〉という言葉が古くから存在する。武道と礼の関係は極めて近い関係にあり、礼を媒介に人間形成を行っているといってもよい。しかし、現在の武道における礼の現状は、形骸化、もしくは虚礼化の傾向にある。オリンピックなどの柔道の試合で見られるガッツポーズがいい例である。つまり、武道の世界においても礼という言葉とその概念が不明解になっているのである。

礼という言葉には、たくさんの意味が存在し、それ自体の定義はないと考えられるが、武道における礼とは、何を指しているのだろうか。武道の礼に包含されているものとは何かについて、我々は疑問を投げかけねばならない。

古代中国で成立した礼は、社会形成の意味合いを強く持ったものであり、礼そのものの概念が生きており、活用されていた¹⁾。時代の変遷とともに礼の価値は多少異なると考えられるが、その本質論や普遍的な概念は変わらないといえよう。

武道の国際化による様々な課題、武道教育の意義や価値について、また伝統とは何かなど、様々な問題の上に立ち、改めて武道と礼の関係について考察する必要がある。本研究は、武道論で論じられている「礼」の実態を把握し、そこにおける問

題点及び補足箇所を見出すものである。武道における礼の本質を探る上での手助けとしたい。

2、阿部忍の武道論

阿部忍はその著『体育/スポーツ哲学論・武道論—阿部忍記念論集』²⁾ “武道における礼の理念”の冒頭で次のように述べている。「武道は礼にはじまって、礼に終わる」、この言葉は戦前戦後を通して、武道の精神的特性の一つとして言い続けられている。しかし、武道や礼といった言葉の意味や内容は、戦前と戦後では大きく変わってきているといわなければならない。阿部はこのことを、全体主義的、軍国主義であった我が国の戦前の教育と、民主主義的に転換していった戦後の教育とを対比させながら検討し、現代の武道における礼の理念について考察している。そして、昭和11年の体操科要目と昭和16年の体錬科要綱における武道種目、剣道と柔道の教育目的をあげ、その中の礼について「この時代の武道における礼は、先生、ひいては権力者に対する絶対服従という形で行われていたといっても過言ではないであろう。そして、これに反逆するものは、無礼者であり、見方を変えれば不忠者でもあったといえよう」³⁾と述べている。礼の対象を権力者に定めて教育を行っていたのである。戦後のわが国の教育を全体主義から民主主義へ、教師中心から生徒中心へと大きく転換したと阿部は述べる。

戦後の柔道や剣道の歩んだ変遷の中、昭和31年の高校学習指導要領で、柔道や剣道の社会的目的として「他人の立場を尊重して、礼儀正しく行動する」、また「正しい権威に従い規則を守る」という内容で礼を重視するようになる。これは武道種目をスポーツに属するものとして捉え、ルールを守って正しく試合するという意味で礼を解釈するようになったのだと指摘している。昭和52年、53年の学習指導要領の改訂においても礼がスポーツマンシップとしての目的であることが指摘されている。

阿部は、武道や礼の意味するところは、戦前では武士道精神の啓培、階級性や権威主義の絶対化といったところにあり、戦後は、民主主義の線上で、武道や礼を把握しなければならないと述べる。そして、民主主義の社会に存在する今日の武道を

“伝統的な運動文化財”、“日本のスポーツ”として捉え、わが国古来の国技（柔道・剣道・弓道など）の総称代名詞として考えている。礼についても、過去の封建的なものをふるい落とした「民主的な精神に支えられた暖かい人間関係から自然に生じてくる礼でなければならない」⁴⁾と述べている。

以上阿部の議論の大筋をみてきたが、学校教育における武道と礼の内容の大転換を経験した世代の代表的で貴重な見解である。しかし、武道における礼の意義、つまり礼とは何かについては述べられていない。ここから時代を超えて変らぬ礼の本質を問うという課題が生じてくるのである。

3、藤堂良明の武道論

次に、『現代柔道論－国際化時代の柔道を考える』⁵⁾、第2章5、“相手を敬い、自己に克つ「礼」の心をとく”における藤堂良明の見解を検討しよう。彼は礼の内容を古代中国からの変遷として描き出している。

「武道は『礼』に始まり、礼に終わる」といわれるように、伝統的な行動の仕方として礼が重んじられている⁶⁾。それは、伝統的な行動の様式とされ、特に試合終了後に深々と礼をすることにより、遺恨をのこさないようにするという意味がこめられているという。藤堂は、礼の有無にスポーツとの大きな違いがあると述べる。つまり、礼は武道の特徴であるというのが藤堂の見解であろう。

そして禮の字の表意を解説し、古代人が幸不幸、天変地異、農作物の吉凶を神の仕業として擬人化し、それに礼をし、祈り、自分の行いを悔い、神の加護を願ったのだと説明している。つまり、礼の起源は祭祀的なものであるとしている。ついで紀元前5世紀の世界に生きた孔子の説を引用する。論語の学而篇で「礼の用は和を貴しとなす」⁷⁾を引用し、人間関係においては相手のこころを察しそれに己を合わせて、全体の和を図っていく、言い換えれば、礼の用は調和であると孔子が説いていると指摘する。

さらに日本における礼に言及し、柔術との関係について論究する。江戸時代前期の柔術流派が和（やわら）と呼称されたこと、そして、対人格闘術でありながら、最終的には和の世界を実現することに、目標がおかれていると述べている。また江

戸時代後期の藩校における武士教育が礼儀と信義を重んじる教育であったと指摘し、明治に入っては、学校教育に取り入れられた柔道における礼について言及している。柔術時代の武道精神としての礼ではなく、柔道を行っていく際に、相手に対する尊敬の念を表すものとして説かれるようになったのである。礼の意味が忠や儀といったところから敬や讓などに変わっていったのである。そして第二次大戦後は、荒々しい格闘技であるからこそ、かえって相手を尊重する心が必要とされ、それを礼に包含した。平成に入り、格技から武道への改訂に基づき、相手への尊敬という礼の他にさらに、「これからは自らの心に対する『克己』の精神を、礼を行う際に説いていくことが必要だろう」⁸⁾と締めくくる。武道となって武士の精神の特徴の一つである克己が、礼によって強調されることになったのである。

以上藤堂の礼についての見解をみると、礼に込められた意味、社会における人間生活上の礼の働き、また武道における礼の意味などが理解できる。しかしこれらを通じて礼であること、いわば現代も古代も、さらに国境を越えても変わらない礼の本質については問われていない。また、スポーツと武道の違いを「礼の有無」と捉えているが、それは「礼の形式の有無」なのではないだろうか。スポーツの世界にも礼は、存在しているはずである。礼に包含されている変らない要素はなにか、また藤堂の考える武道における礼の定義は何かという問題が残るのである。

4、中林信二の武道論

1) 心身一如の教育

中林の『武道のすすめ』⁹⁾について考察する。本書は二部構成からなっており、一部は剣術の発達から現代に至るまでの歴史的編成について述べている。二部は、武道の特性、文化、教育、技と心など、様々な面から武道を考察している。現在の教育のあり方を形式的で詰め込みすぎの傾向であると指摘し、武道の修行法には、現代の教育に欠けている様々な優れた要素があると示している。本研究では、二部について考察する。中林は、武道と教育について次のように述べている。

彼は、まず、人間形成という視点を立て、現代教育の短所（形式主義や知育偏重）を指摘し、現代教育に対する武道修行の補完的な長所を主張する。武道修行を通じ

て礼儀、信義、克己などの行為の徳が身につくというのである。これらは現代教育では身につけにくい（行為の仕方の教育ができていない。主として座学的で観念的である）と述べる。

彼は教育というものについて、①時代毎の要請による特定の能力の育成と、②普遍的で本質的な超時代的な課題、すなわち、徳を備えた人間の形成、という二つの課題を立てる。いわゆる流行と不易である。そして、武道教育の意義を後者の中に位置づけるのである。

中林は、「目指す目標がどうであれ、人間が形成される過程には、基本的で普遍的なはたらきや観点があるはずである。我々は、現代武道の教育的な意義をこのような意味で、その時代の思想や国家による形式的な目標を超えたところに求めているかなければならない¹⁰⁾」と述べるのである。

そして、普遍的な人間の徳的形成の方法について、中林は「心身一如」の教育方法論に立つ。心身は行為において統一され、一如であるのだという。「健全な精神と健全な肉体」の実現が理想とされるのである。「文武両道」についても、文と武の両者が各々個別にその肉体的な向上と精神的な伸長をなした結果ではなく、文・武という教育的契機が一人の人間を武人として自覚に導いた結果、その身につけられた武芸や教養がその人の人間的表現として行為化されたものとみることができると論じる。つまり、教育は人間の肉体的なものを対象とするものでもなく精神的なものを対象とするものでもなく、肉体と精神を不離として持つ行為的人間を対象とするのである。そして、中林は、礼儀について山鹿素行¹¹⁾の言葉を用いて以下のように説明する¹²⁾。

- ① 道徳的人間の形成にはまず威儀を正しくするべきである。
- ② 人の内外は一元であり、外としての威儀が正しいとき内としての徳が正しくなる。
- ③ 外が乱れれば内もこれに応じる。
- ④ 内面を確立するには礼の形としての威儀を正さなければならない。
- ⑤ 威儀を正すことは内面を正すことであり、それは「誠」ならしめることである。

礼とは動作形式のみではなく行為化され心身一如のある種の状態であるというのである。そのような意味で、礼は、武道をする者の心がまえを示すものであり、ま

た身に付けるべき徳目として人間形成の目標となるのである。

2) 自他同根の教育について

武道の稽古や試合においては、まずお互いに礼をし、相手との対戦において激しい闘志と気合でぶつかり合い、それが終わるとまたお互いに礼をする。そして後刻、親しく挨拶をし、話し合ったりする。中林は、このような武道の特徴を厳しさの後の親しさという言葉で表現している¹³⁾。武道は、自と他が勝敗（昔は生死）をかけて争うものであり、言い換えれば自他は対立的なものであり、お互いを否定しあうところに技が生まれていると中林は述べる。武道修行の到達境は、勝敗をかけた危機的場面において自と他の究極境を自覚することであり、相手を恐れず、恨まず、あなどらぬ心境を目指すものという。

人間は、喜・怒・哀・楽・怨・懼・欲・愛・悪・憎・快・不快などの多様な感情を持ち生きている。その中で、礼儀正しい人間関係とはどのようなものか。礼の行為における心身を説明しなければならない。

武道における礼は、格闘する人間関係の出発点である。スタートラインで用意と声が掛かるところである。上記のいずれの気持ちでもなく、虚心坦懐、相手の背後にいる超越者（例えば競技ルールはそれに属する）に対する尊敬の念であり、原点ないし零点に立つのである。これが、行為に移るときに事に当たる態度なのである。物事を始めるにあたり、自ずと無心の境地に立つのである。対事的な心境である。武道の稽古が終われば、終わるという事に行為を導いて、終わるのである。原点ないし零点に戻る。無心の境地においてその社会規範（試合であればコート内の社会規範、つまりルール）を尊敬し遵守し終えたのである。そうでなければ、武道の技やその稽古、試合は、暴力と等しくなり、先述した人間に本来備わっている様々な感情が去来するだろう。自己抑制ができずなかなかゼロに戻れないのである。試合終了後にも相手に対する闘争心が残り、相手に危害を加えることも生じる。その結果、人間関係は不正となる。礼の徳を身につけることは、正しい人間・社会関係を生み出す習慣を得るということである。つまり、礼によって「自他同根」¹⁴⁾の教育を見出し、実現するのである。

3) 礼についての考察

中林の説明は幾つかの前提を立てて礼の本質を明らかにしようとしている。その前提とは、行為における心身一如、あるいは山鹿素行による内外一致、即ち、心と体、技の一致である。そしてこの前提に立ち、礼の働き、つまり礼の効用を示している。しかし、検討の結果、まず「心身一如、内外一致」は、“他者、社会、神”などの第三の要因を考慮する必要があった。内を心とし、外を行為とすれば「内が乱れれば外も乱れる」のであるが、それらの乱れを鎮める力は他者・社会・神など、外からやってくる。つまり、社会規範を礼によって受け入れ、乱れを鎮めるのである。この内と外は一人の人間の内外であり、社会の要因には触れていない。要するに、例えば忠君愛国の心情があるかどうかは姿を見ればわかるのだというのが素行の述べるところであろう。つまり他者あるいは社会、さらには神に向かい合うときに内外一致、心身一如で、正直に、本音・本気で当たれということなのである。究極的には、礼は人間と超越的存在との関係の正しさに関わるものである。例えば、克己の徳とは、苦しさ辛さから逃れようとする己をおさえ、我慢強く修行に取り組み己を伸ばすことであると理解される。これに対して「社会」の要因を加えるとさらに明瞭になる。つまり、＜社会的に見て正しい行為をするために、自己の欲望を支配する力をつけ、我慢強く正しい行為をする習性を形成する＞のである。そのようにして社会的規律は守られるのである。このような、社会的正義の認識にしたがって行為することは、人間と動物では異なるところである。信義行為の徳についても、個人の徳として考えるのみならず、社会的要因を考慮して解釈すると一層明瞭になる。例えば「稽古に出席すると“約束”したら遅刻をしないように出席する、ましてや、無断欠席は言語道断」というような“他者あるいは社会”に対する信義行為の習性（約束した行為は命をかけても実行する）を身に付けさせるのである。礼がその役割を果しているのである。

中林の考察を見てきたが、礼の徳を身につけることは、正しい人間・社会関係を生み出す習慣を得るということである。ここで述べる武道教育と社会との関わり、すなわち、武道教育から社会への広がりについての補足が必要である。中林の論に社会規範ないし超越者に対する尊敬の視点を補うことで、武道教育の方法論が、結

果、社会的教育方法、いわゆる人間形成に繋がっていくことが期待できる。

3、中村民雄の武道論

次に、中村民雄著『今なぜ武道か』¹⁵⁾、第2章“礼”における中村の見解を検討していく。以前、横綱が土俵で<ガッツポーズ>をしたという事実から、昨今は、柔道をはじめ、相撲においてもガッツポーズが黙認されている点を問題とし、礼について論じている。武道が追い求めてきたものは、観客を巻き込んで自己アピールをするような「他者否定」ではなく、「自他共栄」「師弟同行」といった他者肯定の精神である。本来、ガッツポーズといった行為等をタブー視しなければいけない武道などの現状を捉え、改めて礼や武道の問題を整理しておく必要があると中村は述べる。

中村は、人間関係をスムーズにするためのルール、あるいは文化が「礼」であると述べる。その中で、武道の礼が非常に形式的に見えるのは、見られることを意識した「様式美」を追及しているからであると言う。つまり、武道の礼というのは、相手、もしくはそこに存在する人々を意識するものだと言及する。中村は、礼について、「誰かに見られている」ということが前提になっており、その上で、立ち振る舞いの約束事が出来上がっていると述べる。そして、武道と礼について、今日行われている武道の礼は江戸時代のものとは異なり、明治末期に再編成されたものであることを念頭に置いておく必要があるという。つまり、礼やマナーは、時代や場所により独特な形式をはぐくんでいるのである。中村は、形式についての変遷について、「礼とは文化の一形態であり、いかに生活を円滑に進めるかという必要性から編み出された知恵なのである。したがって、時代や場所によって、当然変化する」⁶⁾と説明する。中村の述べる礼の内容は<様式美>として形式にこだわったものであるが、ここに、礼の本質における普遍性を問わなければならない。礼は形式のみではなく精神の体現化でもあり、中村の礼の理論で述べた内外一致という意味も含まれている。つまり、時代や場所によって、その本質が変化することはないのである。

さらに中村は、スポーツ的プレーと武道について言及する。チームプレーであるバレーやサッカーは点数が入るたびにガッツポーズをし、観客や仲間に対するア

ピールやチーム内の連帯感を高める。武道は、相手と一対一で向かい合い、人にも見られていることを前提に、お互いの『慎み』を約束事としている文化であるため、そこにいろいろな礼の形式が制定されている。つまり、両者は基本的に質が違うのであると述べる。ここに第二の課題が生じる。スポーツの世界には、礼という一連の形式や動作は存在しないが、握手やフェアプレーの精神などは存在する。その行為も、相手に対する尊敬の念を体現化したものであり、挨拶やマナーでもある。そこに存在する人間の社会（空間）をいかに円滑に進めるかという知恵なのである。武道の礼と表現の形態は違うが、それらは全て礼と捉えることができる。中村は、武道におけるガッツポーズの例から、スポーツと武道を関連させ両者の違いについて述べているが、武道の世界にもスポーツの世界にも礼は存在する。王貞治が世界記録を樹立した時、王貞治はガッツポーズで喜びを表現していない。喜びを体現化せず、平常心でホームベースまで戻ってきている。形はないが、これも、ピッチャーやその他のものに対する礼の精神の体現化なのである。敬意を示したのである。中村が述べる「両者は基本的に質が違う」¹⁷⁾のは質ではなく、根本的に違うのは、武道においてもスポーツにおいても、そこに存在する人間が、自己抑制ができるかできないかではないだろうか。この論は、先述した藤堂にも言える事である。

中村の論には、礼の一連の形態についての説明はあるが、「人間関係をスムーズにする手段である礼」と武道との関わりについて問われていない。武道という社会、または試合上のコートの中で、人間関係を円滑にするために礼がどのような役割を果たしているのか、また、武道の礼が、社会生活の中で、どのような効果をもたらしているのかについての課題が残る。武道の特性である自己抑制と礼についての補足も必要である。

中村が論じる礼は、形式を中心に展開されているが、前述した中林が論じる礼は、内面が行為化された心身一如の状態であった。両者が論じる礼には、若干の相違が見られる。

4、まとめと今後の課題

現代の武道論における「礼」について大まかにまとめ、そこにおける問題点などを述べてきた。本研究で挙げた武道論で論じられている礼について整理してみる。

- ① 戦前・戦後における社会の変遷（全体主義から民主主義）によって、学校教育における武道の礼の教育のあり方も変わってきている。
- ② 今日の武道を民主主義の社会に存在するものと捉え、礼はその要素を含んでいなければならない。
- ③ スポーツと武道の違いは礼の有無である。
- ④ 礼の起源は祭祀的なものである。
- ⑤ 礼とは、和を図るものであり、相手への尊敬の精神に加え、自らに対する克己の精神も含まれる。
- ⑥ 礼とは文化の一形態であり、いかに生活を円滑に進めるかという必要性から編み出されたものであるため、時代や場所によって、変化する。
- ⑦ 礼は動作形式のみではなく、行為化された＜心身一如＞の状態である。
- ⑧ 礼とは＜様式美＞である。
- ⑨ 現代の教育では身につけにくい行為の徳が、武道教育の礼によって教育できる。
- ⑩ 武道は礼儀を重視し、自分の心に鍛錬があるところに特性がある。
- ⑪ 武道は礼儀作法の教育効果が高い。
- ⑫ 現代の武道は本来、認めてはならない行為（ガッツポーズなど）が黙認されている傾向にある。
- ⑬ 礼とは、人間関係をスムーズにするためのルール、あるいは文化であり、武道特有のものである。
- ⑭ 個我や欲、感情の乱れによる争いを避けるために礼は存在する。

「武道の礼」が人間教育において、素晴らしい要素を持っていることは理解できた。しかし、本研究で考察してきた武道論においても、「礼」そのものの効果が十分理解されていながら、その内容と教育現場での実践がかけ離れ、実に曖昧であるとい

う問題が残る。つまり、武道教育の中で、礼の本質の実践及び教育がされておらず、混乱が生じているのである。礼の教育効果が、現場においてほとんど発揮できていないということになる。

武道には、格闘の特性が残っているため、教育を誤ると社会から外れた人間になることは否めない。最近の傾向に見られる、試合や稽古でのマナーの悪さや勝利至上主義の問題等を武道の礼を介して、もう一度見直す必要がある。

礼の虚礼化や形骸化、また「礼」という言葉に含まれている意義の忘却を防ぐべく、我々は、礼の本質とは何か、変わらないものは何かということを知り解明しなければならない。武道に古くから存在している「礼」を正しい文化として、もう一度形成しなければならないのである。正しい礼の実践及び教育が、武道の世界において、また社会において、その秩序を保つための役割を果たすことを期待したい。

【引用参考文献】

- 1) 末次美樹：「武道における礼の教育的価値」、駒澤大学総合教育研究部紀要 第3号 2008年、pp.305-325
- 2) 阿部忍著：『体育・スポーツ哲学論・武道論』、不昧堂、1990年
- 3) 阿部忍著：『体育・スポーツ哲学論・武道論』、不昧堂、1990年、pp.145-146
- 4) 阿部忍著：『体育・スポーツ哲学論・武道論』、不昧堂、1990年、p147
- 5) 佐々木武人、柏崎克彦、藤堂良明、村田直樹著：『現代柔道論－国際化時代の柔道を考える』、大修館書店、1993年
- 6) 佐々木武人、柏崎克彦、藤堂良明、村田直樹著：『現代柔道論－国際化時代の柔道を考える』、大修館書店、1993年、p69
- 7) 金谷治著：『論語』、岩波書店、1999年、pp.28-29
- 8) 佐々木武人、柏崎克彦、藤堂良明、村田直樹著：『現代柔道論－国際化時代の柔道を考える』、大修館書店、1993年、p73
- 9) 小林信二著：『武道のすすめ』、島津書房、1994年
- 10) 小林信二著：『武道のすすめ』、島津書房、1994年、p152
- 11) 山鹿素行（元和8～貞享2、1622～1685）は江戸時代前期における民間儒学

者の中の大きな存在の一人。いわゆる古学の最初の提唱者としてまた兵学者・武士道の完成者としても広く知られている。

多田顕著：『武士道の倫理－山鹿素行の場合』2006年、p16

12) 中林信二著：『武道のすすめ』、島津書房、1994年、pp.240-241

13) 中林信二著：『武道のすすめ』、島津書房、1994年、p156

14) 中林信二著：『武道のすすめ』、島津書房、1994年、pp.156

15) 中村民雄著：『今、なぜ武道か』、(財)日本武道館、2007年

16) 中村民雄著：『今、なぜ武道か』、(財)日本武道館、2007年、p128

17) 中村民雄著：『今、なぜ武道か』、(財)日本武道館、2007年、pp.128-129